

仏教と福祉とが結合して新しい学ができるかどうか、確かなことは述べられませんが、それで、教育学と社会学とを結合して教育社会学をつくることで多少の苦心をした経験述べ、仏教福祉学は、いかにして成りたつかというような方法的研究は、一応のものにして、社会福祉の現実を対象として、仏教の立場から考察して業績を出される方が学問として早く認められま

しよう。次に福祉の究極目標は「全体的人間としての自己実現」で、その点は教育と同じである。

理論なき実践は盲目であり実践なき理論は空虚であるという。そこで社会福祉という経験的事実を分析して、反省し方法論を確立して学としての仏教社会福祉学が成立するだろう。

おわり

## 浄土教と仏

柴 田 善 守

(大阪市立大学教授)

あと四年で還暦だと思うと、いつの間にかこんなに時間がたつたのだろうか、不思議に思う。ものごころついたころの父は早起きでいつでも仏壇の前で般若心経をとなえていた。われわれ兄弟は父のうしろに座って同じように般若心経をとなえていた。わけがわかるはずはないが、「マカハンニ

ヤハラミッタシンギョウ、カンジザイボサツ、ギョージンハンニヤハラミッタ……オンカイクードクイツサイクーヤク、シャリシシキフイク……」いまでも思い出す。四、五才の子どもにわかるはずはない。父はそんなことにかまわないで、子どもたちを座らせてとなえさせる。

仏壇は金ピカで一間はば、浄土真宗のものであり、仏壇のある部屋をわれわれは仏間と呼んでいた。となりが神間であり、父はここで毎朝祝詞をよんでいた。父はこれらの行為を朝のおつとめといっていた。

仏壇の隅に古い観音さまが立っていた。私はこの観音さまがなぜか好きだった。木彫の観音さまはどこから見てもこちらを向いているように思え、あたたかい、やさしい顔がいまでも心に浮ぶのである。

小学校の高学年になると、いつの間にか毎日のおつとめはやらなくなったが、父は毎日つづけていた。父のおつとめが終らないと、朝食ははじまらないのでよく覚えていた。なぜわれわれ兄弟が朝のおつとめをやめたしまったのか、どうしても思い出せない。

三高の二年のとき、夏休みだったと思う。いま思い出しても不愉快になるほど、キザで思い上りの記憶がある。わかりもしないのに「色即是空、空即是色」ということばを、知ったかぶりして、それも耳学問のうけうりで、友人に話したのである。父にもえらそうにいったものである。父はわ

らって聞くだけであつた。

そのころ「歎異抄」を読む会があり、ここで「善人なおもて往生す、況んや悪人おや」ということばを知って、「価値の転倒」だの哲学用語をなまいきに使つてわかつたような気がしてあちこちでいつたことを覚えてゐる。ただ倉田百三の「出家とその弟子」は一日で読み終え、全身があつくなくて、一週間ばかり興奮状態になつたことを記憶している。

戦争が近よる不気味な時代、いずれ戦争に参加して死ぬかもしれないという気持はあつたが、国民全部が一種の集団ヒステリーのような状況のなかで、なにかあたりまえのことが、そのままに進んでいくという感じで、そのなかのひとりとして大きな動揺を感じなかつた。友人のなかには自殺したものがあつた。彼らはいま考えると大変な秀才であつた。

戦争に行った学友たちは「歎異抄」をもつていたものが多かつた。私は「論語」をもつていつた。なぜ「論語」をもつていつたか、わからない。「友あり、遠方より来る。亦たのしからずや」という儒教の学問は

いつもすがすがしい気持にしてくれたことはたしかである。わたしは台湾にいたが、中国人と親しくなるに従つて、中国人の心の広さとあたたかさをそのままにあらわしているように思つた。

昭和二十一年三月、わたしは故郷に帰つた。わたしは何をしてよいのかわからなかつた。まさに価値の混乱である。友人のあつたものはやみ屋をはじめたといひ、あるものは熱をはじめたといひ。わたしはもう一度大学に入つた。京大の倫理學に籍をおいて、カントの「実践理性批判」を読むことにしたが、何とも心理状態は不安で、とても学問などしておられないという衝動にかけられることがしばしばであつた。

故郷に帰つて、手当りしだいに文學書を夜明けまでよんでいた。四帖半の書齋であるが、障子の外に廊下があり、その前は庭になつてゐた。二十一年五月三日、いまでも覚えてゐる、庭に人影が立つてゐる。ふしぎとそれが誰であるかすくにわかつた。台湾時代にしたくしてゐた中国人の散髪屋である。二十年五月三日に屏東の爆撃で死んだはずの散髪屋である。二、三秒か二、

三分かわからないが、間もなくすーと消えてしまつた。それは幻であるかどうかかわからないが、いまでもその時の状況をまざまざと思い出すことができる。靈魂というものがあつたような気がする。

わたしはしだいに、哲学としての価値の研究をするよりも、価値を生み出した人格に魅力を感じるようになった。ロシア革命のレーニンよりも、フランス革命のロベスピエールよりも、イギリスの一七世紀革命のオリバー・クロムウェルの人格にひかれた。私はこの三人のうち、彼がもつとも純粹なような気がした。一六、七世紀のイギリス史の文献を毎日読むために京大図書館に通う日が多くなつた。コピーができる今どちがつてノートに写す作業の連続はまさに苦業である。大学ノートをかざねると、三〇センチぐらいになつた。

ステュアート王朝のチャールズ一世を裁判にかけ、死刑にした記録を読んだとき、私は身ぶるいをし、背中に汗がながれたことを思い出す。過去の価値の否定である。過去をふり切る自由が、いかに悲劇的なものかということをしみじみと感じた。人間

が人間であることを主張することがいかに困難であることを思つたのである。

私は学者の道よりも実践をしようと思つた。学者としての能力は私はないとも思つた。私は出来たばかりの少年鑑別所の技官になった。私は非行少年とじかに会うことになり、いままで考えていた非行少年のイメージとは全く異なる少年たちを見たのである。

最初にあつた少年は、東京で戦災に会い、両親を失ない、転々としていたうちに大阪の親戚を思い出して、大阪に来たが焼けのが原の大阪では親戚を探すすべもなく、京都にもあるという記憶をあてに京都に行くとするが、サイフの中味はすでになく、歩いて京都に行くとする。山崎の八百屋でリンゴを盗んで、そこにあつた自転車に乗つて逃げたということであつた。「真実一路」という小説を、私はふと思ひ出した。二日間も食はずに歯を食いしばつてがまんをした少年は立派だと思つた。しかし罪は罪である。

そのうちに、「だれもわかつてくれない」と、私の前で泣き出した少年があつた。孤

独の姿を私は見たのである。「親も先生も、友達も私をわかつてくれない」という。どうしようもない人間の業のようなものを私は感じたのである。なるようにしかならぬ人間の姿である。彼らは非行が非行であることは十分に知っている。

しかも彼らは非行を行なうのである。そのころ、戦前の三高時代に読んだドストエフスキーの「罪を罰」を再び読んでみた。

(この小説はいままで時間があると読んでいた)ラスコールニコフは英雄にならうと思つた。ナポレオンの前にはアルプス超えもあつたし、エジプトもあつたが、「私の前にはあの強欲な金貸しの老婆があるだけだ。」ラスコールニコフはなやみになやむのであるが、ある時点を考えると、ナポレオンにとつてはアルプス超えもエジプトも金貸し婆も同じであると思つた。彼はあの金貸し婆を殺してしまつた。ところがラスコールニコフは逃げ廻るのである。

彼は売春婦ソーニアに会つてすべてを告白する。その告白によつて、自由を獲得し、自首をして流刑となり、シベリアに送られる。影のようにしたがうソーニア。この売

春婦ソーニアのなかに、ドストエフスキーは神の愛を表現しようとするのである。ラスコールニコフは孤独ではない、神があるのである。バイブルのマタイ伝の終りのところで、キリストは

見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのであるといつてゐる。

私は「同行二人」と笠に書いたお遍路さんの姿を思い出すのである。またある老人ホームの老人が「おむかえがくる」といつたことを思い出すのである。そして歎異鈔で親鸞が「弟子をもたずそうろう」ということばを思い起したのである。再度歎異鈔を机上に置くようになった。

間もなく、大阪市立大学家政学部に社会福祉学科ができて、私はここで学生諸君を教えることになった。そしてすめられて石井記念愛染園に出入りするようになった。それが石井十次との出会いである。

親鸞と石井十次、えもいわれぬとりあわせであるが、私にとつては、なやみになやむ若い日の親鸞と石井十次の生活がだぶつて見えたのである。ある青年は、「先生は

たくわんみたいにいっでも頭の上に石(井)がのつている」といつていた。私が話しをするときはいつも石井十次の話であつた。

石井十次の日記には、いたるところに「天のお父さま、どうしたらよいのてしうか」ということばを見出すことができる。石井は神の啓示を聞き、または見ることのできる人だつた。とうとう、私はクリスチャンにはなれなかつた。もし直接に石井と会えばどうなつたかわからない。「石井十次の生涯と思想」という本をまとめてぼつとしたころ、たまたま故郷に帰つて、母親と話をしていると、母親は法然の話をし出した。母親が常住している隠居所の机の上に「浄土勤行集」があつた。「まだほかにもあるから、もつていつてもよいよ」と母親がいうので、もらつて歸つた。その夜はガタガタになつたという表現しか私にはできない。「一枚起請文」、「一紙小消息」を読んだのである。一夜私は寝ることはできなかつたし、涙が出てしようがなかつた。

たとひ法然上人にすかされまひらせて、念仏して、地獄におちたりとも、さらに

後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自余の行をはげみて仏となるべかりける身が、念仏を申うして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

親鸞がこれほど傾倒した法然、私は全くかなしげにであつたといつても当然であると思う。法然は小説にならない人だといふ。「紫の雲」という佐藤春雄の小説の中に読んだが、吉川英治の「親鸞」の方がずつとおもしろい。

「地獄は一定すみかぞかし」ということばは青年時代に感じたものよりもはるかに重たい、ズシツとこたえるのである。五〇才をこえる年になつて、あらためて歎異抄を読みはじめた。桂駅から乗ると、私は歎異抄の一章を読むことにした。帰りも同じである。法然にすかされるならどこえいつてもよい、という親鸞の気持は、遠い向うにあるような気がする。いったい人間とは何だろうか、と思う日が多くなつた。

大阪市立大学で社会福祉を研究するよう

になつてから三〇年近くになる。社会福祉は教育や医療とともに実践である。社会福祉の原点は救済である。人間が人間を救済するということは傲慢である。そんなことは不可能である。それは神の行為でなければならぬ。

カントの哲学は理性の発見であるといわれるが、その理性を人間が持つていふといふより、神からあたえられたことに感謝するのである。謙虚な人間の在り方を説くのである。

人間は手段としてのみ扱われてはならないといふことばは、社会の在り方を説くのである。しかしカントの理想とはことなつた十九世紀、二〇世紀があるのである。マルクスは資本主義社会が人間を手段化したことに對して抗議をする、また実存主義の哲学もまた人間の存在を主張する。

本の名前は忘れたが、たしかリルケの作品だと思ふ。中世紀の民譚を紹介する小編がある。ある貴族のお姫さんが日曜の朝、教会へミサに行く、教会の前には何人か乞食が座つていた。彼女はいくら自分のもちあわせている金をめぐんでやりたいので

あるが、どうしてもそのような行為ができない。うしろがみをひかれる思いで教会に入るのである。

お姫さんは聖母マリアに祈りながらどうしたらよいかをたずねる。長い時間が経った。今度ははれやかな顔をして教会から出てきて、先ほどの乞食の前で深々とおじぎをして金をおいてゆくのである。

救済は神にしかできない。人間がおこなう救済行為は神を前提としている。救済をさせていただくという神への感謝がなければならぬ。一八世紀以降、教育も宗教行為からはなれるが、それは理性があるからだという。しかしその理性は神からあたえられたのだとカントはいう。

いく度かくりかえして読んだ歎異抄がある。私の前にたちはだかるように出てきたのである。

弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつところのをこるとき、すなわち摂取不捨の利益をあずけしめたまふなり歎異抄の冒頭の句である。なぜいままで素通りしてきたのだろうか、と

がく然とした。

社会福祉の原点はここだと思った。私が救われるという確信がなければ人を救うことはできない。「私が救われる」と思ったとき、そのよろこびをみんなに伝えたい、親鸞の生活はこれだと思った。

この日が来るよりずっと前から、私自身はボランティア活動をやっていたし、ボランティア諸君の相談相手になっていた。人間の社会が成立するためには、欲得ぬきの行為がなければならないと私は考えていた。そんな同志がいることを発見したときは喜びであった。ボランティア協会はこのようなにして生成してきたように思う。ボランティアの原点も自らが生きる喜びをもつことであると思う。

ときあたかも大学紛争の時代である。大阪市立大学もそのただなかにあり、一面では私自身学生諸君と共に鳴るものをもっていた。明治以来の教育制度の象徴的存在である大学の教育はこのままではだめになる、かえって人間をスポイルしてしまう、とほんとうに思った。講義も演習も全く行なわれないが、研究室で泊りこむ日も多か

った。

数百人の学生がデモを行なって、学内騒然としたひる間を忘れたように、静かな夜であった。つかれた神経が妙にピリピリして寝られず、研究室でウィスキーをなめていると、先輩の先生が入ってきた。自然科学を専攻している先生であるが、その先生が法然の話しをはじめたのである。何がきっかけか私は思いだせないが。

たとひ、一代の法を能く学す共、一文不知の愚鈍の身になして、厄入道の無知のともがらに同うして、智者のふるまひをせずして、たず一向にねん仏すべしほとんど暗記するようにこの先生はいわれたのである。一夜を先生とともに明かした日は忘れられない。この先生の人格がにじみ出て、この先生なればこそと今でも思っている。

あれだけのエネルギーを消費しても大学は変らなかつた。むかしと変らない大学がいま存在する。歴史を変えることが、いかに困難なことか、イギリス一七世紀の革命を思い起すのである。

再び講義がはじまった。学生諸君に社会

福祉の歴史の講義のはじめに、キリスト教の神の愛であるアガペとギリシア神話でてくる。人間の愛エロスの話しをしていたとき、ふと歎異鈔の「すえとをりたる大慈悲心」を思い出した。

慈悲に聖道、浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐるこゝと、きわめてありがたし。また浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏となりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益す

## 仏教福祉と社会福祉

——「自由」を視座にして（私見）——

野村 博  
(仏教大学助教授)

るをいうべきなり。今生に、いかにいとし、不便とおもふとも存知の如くたすけかたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと、云々私にとつては、法然も親鸞もひとつに見える。幸福とは何かというとき、二〇才までのもの、三、四〇才代のもの、五〇才をこえた今のもの、それぞれ異なっているように思われるが、ようやく他力本願がわかりかけたように思う幸福を一面で感じるこのころである。

ルは、人間が今日まで闘争してきた戦いは人間と自然との戦い、人間（自分）と人間（他人）との戦い、人間（自分）と自分自身との戦い、の三種類であつて、自然との戦いは自然科学と科学技術により、人間との戦いは政治と戦争により、それぞれ行なわれてきたし、また、個人の魂の内部で猛威をふるう自分自身との戦いは今までのところ宗教により処理されてきた、と述べている。

自然との戦い、人間との戦い、という長い時代にわたる二つの戦いによって形成されてきた人間性は、ラッセルによれば、以前は適切なものであつたが、今や時代遅れのものになつてしまつた。したがつて、人間と自分自身との戦いは、人類進化の最後において最高の重要性をもつた戦いとなつたのであると論じている。

確かに人間は、物理的自然との戦いにおいて、自然の秘密を理解し自然の法則を発見することによつて得られた科学的知識とこの知識に基づいて自然を変革しようとする科学的技術によつて、物理的自然のいわゆる征服ないし支配に成功をおさめてき

### 一 人間の戦い

第二次世界大戦が終結して六年経つた一九五一年、バートランド・ラッセルは、

『変わりいく世界への新しい希望』(New Hopes for a Changing World)を出版した。

そのなかで、人間の本性は絶えず何ものかと闘争するものであると考えるラッセル